

ジオラマ表現を媒介とした 青年期ひきこもりと社会との接合可能性

八尋 茂樹

目次

- I. はじめに
 - II. 事例 無職R (19) への施療事例
 - 1 問題の背景と経過：家族歴及び生育歴
 - 2 援助開始
 - 2-1 第1フェイズ：援助方針の設定と介入
 - 2-2 第2フェイズ：援助計画の変更と再介入
 - III. 考察：ジオラマ制作の効果
 - 1 サンドアート、サンドプレイとしてのセラピー効果
 - 2 変化自在なジオラマのセラピー効果
 - 3 石庭そのものが持つセラピー効果
 - 4 課題
 - IV. 結びにかえて
- 註
引用・参考文献
謝辞

Abstract

In this paper, the system theory is applied to support and intervene a stay-at-home adolescent. The author sets up a hypothesis that building miniature dioramas of Japanese rock gardens or Zen gardens is very useful to get out from under social withdrawal and to restore relations with his/her family members. This method takes particular note that many people are healed through appreciating beautiful gardens, especially gardens influenced mainly by Zen Buddhism. It doesn't require high costs and a large space to build dioramas of Japanese rock gardens. This tells that this methodological study has possibilities and productive, future issues.

キーワード：ひきこもり、エンパワメント、ジオラマ、石庭、家族再統合

I. はじめに

I P (Identified Patient) の主体性を尊重した個別援助技術の手法は、いわゆるエンパワメントやストレングスの視点に立っており、その効果が非常に大きいことを教育や福祉の現場に立つ者はすでに知っている。この効果はI Pのスキーマ（認識の形式や構造）や資源を、援助者がI P個人に向けて再構成することから得られている。同時に、より大きな効果を得るためにI Pの独自性のある土壌で流動的にスキーマを再編することは、大げさな言い方をすればI Pの数だけ援助者が過程を経なければならぬ（八尋、2008）。本稿は、その「過程」の効力をひとつずつ確認する作業検証のうちの一つである。I Pの中に眠る資源をいかにして見出し、その肯定的リサイクルを可能とする手法に関する知見の断片に触れるために、今回はひきこもり傾向にある青年がジオラマ制作を通して社会との接点を持つ可能性、また、制作に起因すると思われる様々な心的変化についての考察を行う。特に石庭のジオラマの制作がI Pのひきこもり傾向の緩和と、悪化した家族関係の修復に及ぼす効果についての検討を行う。

II. 事例 無職R（19）への施療事例

家族構成：R（19）母（44）妹（17）／祖母（享年69）

1 問題の背景と経過：家族歴及び生育歴

Rが1歳10ヶ月、妹が4ヶ月の時に両親が離婚。父親からの養育費は2年目に入ると途絶え（現在、父親の所在は不明）、以来、母親は清掃業のアルバイト（早朝）とスーパーマーケットのパート（昼前から夕方まで）とを掛け持ちして家計を支えてきた。そのため、幼少時から母親よりも祖母との接触が多く、小学校で家族の作文があるといつも祖母の話を書いた。Rは「祖母に育てられた」、「母には叱られた思い出しかない」と言う。その祖母はRが中学3年生の秋に突然他界する。この時のRの落ち込み様は大変なものであったという。

Rは園児の頃から目立たない、大人しい子どもだった。ふたつ下の妹の面倒も良く見た。小学校低学年の時にカード収集が流行り、クラスでお小遣いの無駄遣いが大きな問題となった時も、Rには全く無縁の騒ぎで、お年玉にも全く手をつけない子どもであった。小学校の頃の成績は極めて平均的であったが、中学2年生の頃から伸び始め、3年生では常に成績上位のグループに属していた。しかし、合格の可能性が極めて低いと言われた公立の最難関高校の受験に挑戦するも失敗し、私立高校の特進科に入学する。高校2年生の2学期から不登校となり、学年末に自主退学。直接的な原因は、夏休みに昼夜逆転の生活となり、2学期になっても改善されなかったためであった。昼夜逆転の生活は、1学期の成績が思ったように伸びず、夏休みの夜に、将来のことを悲観的に考えてしまうと眠れなくなり、朝方まで深夜のテレビ放送を漠然と眺めているうちにリズムが崩れたことに起因するという。朝6時頃に就寝し、昼2時頃に起床するリズムとなっている。ほとんど家から出ないが、起床する午後2時から3時の間に、近くのコンビニエンスストアまで行くことがある。母親がダイニングルームに100円玉をたくさん入れた缶の茶筒をRのために置いており、家族が留守の間に、自分が食べたい菓子パンとジュースを買いにコンビニまで出向く。この時間帯を選んで外出するのは、同年代の知人に最も出会わない時間であると考えているためであった。知っている人以外ならば、さほど会うことに抵抗はないと発言しており、援助者と面会することをRは拒んでいない。

18歳になった頃、妹が「Rのせいで学校で嫌な思いをしている」と母親に告げ口しているのを聞いてしまい、それ以来、妹と不仲となり、また、自己嫌悪も一層ひどくなった。これを境に、特に母親に対する暴言が始まる⁽¹⁾。Rの罵声は近隣住民にも聞こえており、母親は、「近所の人たちからよそよそしい態度で接せられるように

なり生活がしづらくなった」と感じるようになる。母親は、祖母の死以降にRの成績が下降していったことから考えて、祖母を失ったショックが受験の失敗に影響を与えたのではないかと述べている。また、不本意な進学によって勉強や学歴に対するコンプレックスが激しくなったために退学に至ったのではないかと考えている。できればRが社会復帰してくれることを願っているが、少しでも多く外とのつながりを持ってくればと母親は強く希望している⁽²⁾。

主訴：Rのひきこもりの緩和、副訴：家族の再統合

本援助では、Rの生活形態の改善と精神的安定を目指した上で、外部との接点を持たせることによってひきこもり傾向を緩和し、最終的に家族を再統合させることを試みた。

2 援助開始

2-1 第1フェイズ：援助方針の設定と介入

趣味や特技は特になし。1日の大半をテレビ番組（Rの家庭はケーブルテレビに加入しているため、40チャンネルほど視聴が可能である）を見て過ごす。若者が好むゲームや漫画に興味はさほどなく（実際、Rの部屋にはゲームソフトや漫画本はひとつもない）、スポーツはするの観るのも好きではない。音楽もファンになるほどの好きなミュージシャンはおらず、強いてジャンルを挙げれば、祖母がかつてテープレコーダーで好んで聞いていたクラシック音楽とエンヤ⁽³⁾だという。中学時代は環境科学クラブに所属し、そこでのボランティア活動には参加していた（高校時代は所属クラブなし）。中学時代は数学や英語、理科などが得意科目であったが、高校1年生の後半頃から苦手な科目となってしまった。家庭ではインターネット回線を引いていない。携帯電話は中学2年時より所有しているが、電話やメールをするような知人や友人がもはや存在せず、利用明細書においても約1年間使用した形跡がみられない。テレビ中心の生活であるにもかかわらず「テレビは暇潰し」と言い、テレビ番組やタレントへの興味が極めて薄い。会話の中で何度か「僕はつまらない人間ですから」、「何やっても駄目だから」などの発言が繰り返された。以上のように、Rの場合、趣味の中に文化的資源を見出すことが非常に困難なケースであった⁽⁴⁾。

2回目の面談時、Rは幼い頃に鉄道が好きで、祖母に近くの線路脇に連れて行ってほしい、何時間も電車が通るのを一緒に眺めていたことが強く記憶に残っていると述べた。援助者は過去に、9ヶ月ほどひきこもっていた青年への援助において、その青年が鉄道ファンであったことから、鉄道模型用のジオラマを共同制作したことがあった。その事例では、制作過程において青年が「リアリティを追究したい」という欲求にかられたため、実物の鉄道関連施設や風景などを見学し、写真を撮りに出かけるようになったことから、社会との接点を容易に見出すことができた。このように、室内で鉄道ジオラマを制作することは、鉄道写真の撮影や鉄道旅行と結びついた時点で外の世界への窓口となる可能性がある。よって援助者は、文化的資源を見出しにくいRにおいて、肯定的に咀嚼されているこの記憶を重視し、過去のこの援助事例に倣って、Rに対しても鉄道模型とジオラマ制作による社会との接点を探る方針をとることとした。

翌週、援助者はNゲージの基本的なセットを持ってR宅を訪れた。Rが初めて見るNゲージに少し興味を示したため、部屋を整頓して2畳程のスペースを作り、そこに線路のみを組み立てた。早速電車を走らせてみると、Rはさほど笑顔は見せなかったものの、援助者が去るまで遊び続けた。翌日、Nゲージを利用したジオラマ制作の雑誌をRに郵送したところ、これに対しても多少の興味を示し、翌週の訪問時にはジオラマ制作をしてみたいと述べるに至った。よってこの訪問日に、急きょ繁華街の玩具店に材料を買いに一緒に出かけることにした。この日から3週間に渡ってRと援助者はジオラマの共同制作を行うが、制作開始直後はRが積極的に取り組んでい

たため、援助方針が好転しているものと思われたが、2週間ほど経過すると、援助者が訪問しないとほとんど作業をしなくなっていた。制作開始2週目のトンネル制作の際に、援助者はRを誘って実物のトンネルを見学に出かけたが、その後に駅の見学などを提案するも、「面倒くさい」とRは応じなかった。Rの鉄道模型ジオラマに対する関心は目に見えて落ちていった。また、結局は援助者に制作の大半を任せて完成させた鉄道模型ジオラマであり、完成した直後こそRも電車を走らせて遊んでいたものの、完成の翌週の訪問時にはすでに飽きてしまっている様子が見えられた。そして、制作から5週目で、鉄道模型ジオラマを用いて社会との接点を見出す計画は膠着状態に陥ってしまった。

2-2 第2フェイズ：援助計画の変更と再介入

8月、再び外出をしなくなったRを大野靖之の野外ライブに誘う⁽⁵⁾。Rは最初の面談の際に「クラシックやヒーリングミュージックは嫌いではない」と発言していたため、癒しの効果が期待できる大野靖之の歌にRが共鳴することを期待し、そして、停滞している援助に変化をつけるために誘ってみた。Rは「退屈しのぎになるのなら」と言いながらもやや饒舌となり、久しぶりの夜間外出を楽しみにしているようにも見えた。ライブ会場は岡山市の幻想庭園（後楽園）であった。大野靖之の透明感のある歌声が、夜、ライトアップされて幻想的に浮かび上がった庭園に響き渡り、Rは非常に感動し、援助者が期待した以上にその場に引き込まれていくのがわかった。このコンサートの帰途、援助者はRに、以前制作した鉄道模型のジオラマを、（幻想庭園をイメージした）ライトアップされた庭園のようなものを作り変えてみてはどうかと提案してみた。ライブの興奮も手伝い、翌日から構想を練ってみることになった。

翌日、構想の資料として庭園に関する写真集や書籍をRに渡すと、写真集を1時間ほど熱心にながめていた。その後、すでに制作済の鉄道模型のジオラマを幻想庭園風に作り変える方法について話し合ったが、実際には難しいことがわかり、その場では結論が出なかった⁽⁶⁾。

しかしその一方で、庭園への関心は冷めず、写真集に掲載されていた京都の庭園のいくつかを訪れたいという要望をRは提示してきた。翌週、援助者はRと日帰りの京都旅行を行うことになった⁽⁷⁾。Rの希望のうち、予約を入れていなかったことから断念した西芳寺（苔寺）以外、松尾大社と竜安寺、鹿苑寺、大徳寺、建仁寺とまわった。Rは特に石庭に大変興味を示し、中でも大徳寺の東滴壺を非常に気に入った。東滴壺は四坪ほどの日本国内最小の壺庭である（図1）。



図1 大徳寺・東滴壺

援助者は自室でもジオラマのような枯山水が表現できるのではないかと提案してみた。鉄道模型のジオラマ制作であまっているバラスト（砂）を利用すれば造ることが可能かもしれないという結論に達し、早速翌週から取り掛かることにした。Rと援助者はDIYの店に出向き、下敷きとなるベニヤ板などを購入。帰宅後1時間ほどで砂を入れる箱を作り上げ、まず単純に砂を敷いた。その後、Rは歯ブラシや櫛などを持ってきて、最終的には爪楊枝で手製の鍬を作り、砂に線状の模様をつけ始めた。これだけでは殺風景すぎるということで、家の外の砂利からいくつか気に入った小石を拾ってきて、好きなように置いてみている。Rは何度も満足のいくまで模様をつけ直したり配石を変えたり、1時間ほど熱心に造り変えていた。Rは模様を描き換える時に、たくさんのバラストを手に含ませて模様を消したり、山を造ってみたりしていたが、「さらさらして気持ちがいい」とも述べた。ここまでの援助過程において、昼夜逆転の生活を修正する試みはしてきたものの、夜中に何度も起きてしまうなどなかなか治らなかったが、(Rの記憶では)石庭のジオラマ制作を始めた翌日あたりから、夜中に起きることもなくなり、朝8時起床、夜12時就寝というリズムを保てるようになってきていた。

ジオラマ石庭の制作開始から1ヶ月間、Rが1週間で最も満足のいく出来栄であると感じた作品をカメラで撮影してもらっておき、毎週の訪問時に見せてもらう作業を続けた。援助者はその時に、Rが満足した理由も聞いた。1週目は「どこがとは言えないけど、自分なりにできたと思う」と漠然とした回答であったが、その後の作品と比較すると、最も現実の石庭を意識した造りとなっていた。2週目には「波紋をもう少し理想的に描けたら良かった」と発言しているが、1週目と比べて非常にシンプルなデザインとなっている。3週目は「下手なりに円が描けた」と謙遜しながらも、川面に落ちた滴を思ったようにデザインできたという手ごたえを感じているようであった。4週目では「波と波紋の組み合わせが気に入っている」と、具体性と満足感が発言内容に盛り込まれるようになった(図2)。また、一度作った作品をリセットするために砂を均す時に、箱を左右に少し振ったり、軽く叩くだけでまっさらなキャンバスに戻るのがとても気持ちがいいと述べている⁽⁸⁾。なお、3週目の訪問後に、母親からRの暴言が全くなくなったと報告を受けた。

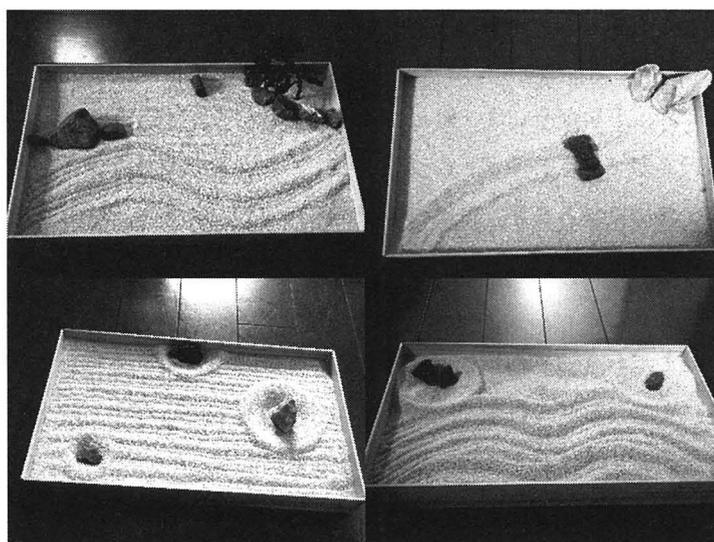


図2 制作した石庭ジオラマ
左上1週目、右上2週目、左下3週目、右下4週目

Rはどんなに気に入った作品ができて、2日から3日経過すると別の模様で作り直したくなり、結果的にたとえ同じ様なデザインになったとしても、砂を触り、変化させる行為そのものも楽しいと述べている。ジオラマ石庭制作開始から4週目の訪問時には、「また、京都に(石庭を)見に行きたい」と発言し、同時に、禅につい

でも勉強してみたいと述べた。なぜ石庭が気に入ったのかという質問にRは、「他の庭とは違って、攻めてくる（責めてくる？）感じがいない」、「全てを包み込むというか、受け入れてくれそうな空間がいい」と答えている。

6週目には、妹が作品を一度見てみたいと言っていたと伝えると、「まだ見せられるレベルじゃない」と照れくさそうに拒んだが、「会心のができたら、その時はいいけど」と妹の話題への反応が明らかに柔らかくなってきていた。

Ⅲ. 考察：ジオラマ制作の効果

本稿におけるジオラマを利用した援助は、通常の箱庭療法と異なりながらも、箱庭療法との接点、共有点を見出すことが可能である。ただ、箱庭療法は広く知れ渡った分、IPの年齢が高くなってくると、箱庭のセットが放つ独特の雰囲気（オーラ）から、「検査される」、「テストされる」という思いを抱かせ、援助者に対する拒絶反応を引き起こすこともある。その点において、色彩的にも使用アイテム的にも石庭ジオラマは「子どもの玩具」というよりも「大人のホビー」的印象の方が強く、年齢を重ねたIPに対しては取り付きにおいてさほど困難ではないと考えられる。「自由にして保護された空間」（カルフ、1972）は石庭ジオラマにおいて提供可能であり、その空間を利用してIPのスキーマの破壊と再構築が行われると考えられよう。以下、この石庭ジオラマがIPに及ぼす効果がいかなるものであるかを検討してみたい。

1 サンドアート、サンドプレイとしてのセラピー効果

まず、この石庭ジオラマでは「砂（サンド）」こそが主役である。箱庭療法では、数多くのフィギュアを思い通りに配置することで心的物語を再構成するが、石庭ジオラマでは石を2個、3個使用する程度で、砂に描く模様にかに自分の思いを投影できるかがスキーマ再構築の鍵となっている。

そして何よりも、砂はまず触れた時の心地よさが現場のIPに皮膚感覚レベルで大きな影響を及ぼすと考えられ、この点においては箱庭療法と共通し、あるいは、その特性のデフォルメであるとも言えよう。本稿の援助過程においても、「さらさらしていて気持ちがいい」と、右手から左手、左手から右手へと手の中の砂を繰り返し持ち返る行動が度々見受けられ、IPがそこに「癒し」を求めていたことは容易に理解できる。

さらに言えば、砂を触る行為が「母性の希求」につながっているとも予測できよう。本稿のIPは、物心つく前から父親と別れ、母親が父親の役割となり、母親の役割を祖母が担ってきた。その祖母を突然失ったこと（対象喪失）は、心地よく寄りかかっていた（包まれていた）母性の喪失であり、IPの心の中に突然できたその穴を埋める効果があったと思われる。

また、曲線や円（波紋）にこだわり、それらを思い通りに描くことに焦点を合わせている発言が多々見られるが、波紋を描くことは単純に実際の石庭の影響を受け、それを再現しているだけではなく、柔らかな曲線を描くことで母性の再現をIP自らが成し遂げようと試みているともとれよう。

2 変化自在なジオラマのセラピー効果

前節でも触れたが、本事例より1年ほど前に、自称「鉄道おたく」であるひきこもり気味の青年が自宅で鉄道模型のジオラマを制作し、よりリアリティを求めるために実物の電車や風景を撮影しに外出するようになったことがあった。この事例を受けて、鉄道に興味のあるIPならば、鉄道模型を通じて実際の鉄道との接点（外部とのつながり）を持つと非常に大きな期待が持たれたのであるが、残念ながら、本事例ではその発展性は望めなかった。その理由のひとつに、単純にIPがそれほど鉄道には興味なかったことが挙げられるが、もうひとつ、

電車を動かすことによって「動」の興味を持たせることはできたが、そこにIPは、自らの意思で世界観を動かす「生」の興味を見出せなかったということが挙げられよう。すなわち、IPのその時の気分によって自由に変化、変形させることのできる石庭ジオラマと異なり、鉄道模型のジオラマは一度制作が終わると代わり映えしない風景へと固定されてしまい、鉄道そのものに興味がないIPは飽きが早くなりがちである。これは、石庭ジオラマの制作に入る直前に、(自由自在な変化が期待できない) 幻想庭園をイメージしたジオラマ制作において躓きを見せたことも無関係ではないだろう。

それに対し、石庭ジオラマは、IPに「生」の興味を抱かせたと考えられる。宮元(1998)は、庭の美は「癒し」をもたらす反面、「他界」、「滅び」という側面を持ち合わせていると指摘する。日々、自由に制作できる石庭ジオラマでは、一度形成し、そこに宿った「癒し」や「滅び」を自らの手(力)によって一旦終了させ、新たに「再生」させることが可能である。つまり、非言語的表現による、自己の「再生」の模索が自在に可能なのである。石庭ジオラマの制作は、「静」の空間に「生」の意味を吹き込む作業であり、この作業の連続性がIPの意識に大きな変化をもたらした可能性をここでは指摘したい。

「遊戯的構造物は、幼い建築家の内的世界と彼の住む社会の変化しつつある世界観との間の創意に充ちた交渉」というエリクソン(1981)のことに倣うならば、ジオラマ制作には現実世界との「創意に充ちた交渉」が認められる。より具体的なサンドドラマ形式をとる従来の箱庭療法に加え、制作後に「完成した美」を愛でる鉄道模型やプラモデルなどのジオラマや、自在な変化に日々精神的な安定をゆだねることができる石庭ジオラマなど、事例ごとのIPの性質、状態、志向によって、それぞれの形態のジオラマが対応し、効果を発揮すると思われる。

3 石庭そのものが持つセラピー効果

もちろん、石庭そのものが持つ「癒し」の効果は無視できない。IPが制作した石庭ジオラマは、京都で影響を受けた石庭が根底となっており、例えば、制作し始めた当初は配石を方丈中央から扇状に施するなど、遠近感を強調するパースペクティブの手法を取り入れるなど、数多くの石庭を意識した痕跡が端々に見受けられた。IPが実際のほとんどの石庭の「横から眺める視点」にこだわらなくなり、上から見渡す「鳥瞰図的」な石庭ジオラマに愛着を持って接し続けるようになったのは、やはり大徳寺の東滴壺の世界観が最も大きな影響を与えたためであろう。石庭に興味を抱いていく段階において知りえた小さな宇宙を、石庭ジオラマによって自らの手で自在に操ることができる快感を覚えたように見えた。

もともと、援助者は、幻想的な空間や緑や赤の鮮やかさ、静けさといった癒しの要素をIPに提供することを意図して庭園巡りの計画を立て、実行した。しかし、その意図に反するようにIPが深い興味を示した枯山水、そしてそのミニチュアである石庭ジオラマ制作は、鉄道模型ジオラマ、あるいは、箱庭療法と比較して、ダイナミックさにおいても色彩的にも非常に見た目はシンプルである。逆にこのデザインのシンプルさこそが、「攻め(責め?)られない自己」、「自己の全てを受容してもらえる」という自己防衛における安心感につながっているとすれば、その世界観を自宅の机の上で再現し、また、それを繰り返すことによってIP自身の攻撃性を鎮め、家庭内の人間関係に好影響を与えたとも考えられるのではないか。

さらに、石庭の砂には水のイメージが包含されている点も重要であろう。IPが静なる水の中に生なる波紋を描くことに夢中になったことは、水の持つ癒しが石庭においては提供されているからと考えることが可能である。水に関する心理的要素からしても、水の深みを覗き込むことが無意識の深みに降りていくことだとすれば、IPが自我をそこに写し求めることにつながったとも考えられる。

4 課題

本稿におけるIPは、シンプルな色彩（モノトーン）の砂の上で、多様なフィギュアは用いず、岩に見立てた小石のみを使用したことから、制作過程において箱を前にして自己問答を幾度も繰り返したと思われる。ひとつにある程度年齢を重ねた大人でなければこの過程にはたどりつかないであろうし、さらには重要な入り口の「石庭」にすら興味を持たないことも考えられる。また、制作に高度な技術が要求されないばかりか、年齢に関係なく遊ぶことができる方法とは言え、様々な形を創造できる砂遊びほどの自由度はなく、低年齢のIPには援用が難しいであろう。また、制作過程の自己問答に大きな援助効果を見出すとするならば、例えば、暴力傾向にある非行少年や統合失調症の児童といった特定の特質を持つIPへは、実施そのものの困難さや心的危険性が伴うことも予測され、援用には十分な注意が必要となろう。これらの課題に関しては、今後の継続的な研究によって明らかにしていきたい。

IV. 結びにかえて

秋、Rと援助者は、紅葉の季節に再び庭園巡りをした。この時は母親が同行した。2年前に清掃の仕事で足を少し悪くした母親がRの後ろをゆっくりと歩いていると、Rが振り返って母親に大丈夫かと気遣った。一瞬、母親は泣き顔になったように見えたが、笑顔を作って「大丈夫よ」と言った。Rは表情を変えずに再び前を向いて歩き始めた。援助者が母親の横に並んで歩くと、母親は立ち止まって「ありがとうございました」と深々と頭を下げた。この翌週を区切りに、別のスタッフと援助を担当交代し、Rの社会復帰（就業）支援を依頼した。

その冬、保険証を持って公立図書館でカードを作り、禅に関する本などを借りるようになったとR本人からメール連絡があった。また、その帰りに、シアトルスタイルのカフェに寄って、借りた本をゆっくり読むのが最近のお気に入りであるという。Rはまだ、自分の近い将来すら決めかねている状態ではあるが、交代した援助者からは、母親も妹も（おそらくかつてのように）よく笑うようになり、間違いなく家族再統合のスタートラインに立てたという明るい報告を受けている。

註

- (1) Rは暴言を繰り返すものの暴力を振るうことはなく、家庭内で暴れたという形跡は全く見られなかった。妹に対しては徹底的に接触を避けていた。
- (2) 本稿における援助相談事例は2008年6月26日に受理し、インテイク面接を同年7月5日に行っている。本節の「問題の背景と経過」は、第1フェイズでのインテイク面接時のフィールドノートから構成。また、年齢はインテイク面接当時。筆者が関係する援助契約の終結は、同年10月6日。
- (3) 教会音楽やクラシック音楽、ケルト音楽を基盤とした、ヒーリング音楽的な楽曲を歌唱する女性ミュージシャン。
- (4) このように要約して記述すると、読者は文面から、援助者に対するRの反発から無愛想な応対となっているような印象を受けるかもしれない。しかし実際には、Rは終始友好的な会話に努めており、援助者が（初めて）来訪すると知った時は、前日に部屋を片付け、訪問当日は、R自らがジュースを出してくれるなど、むしろ歓迎の雰囲気の中の面談となったことを付け加えておく。
- (5) 大野靖之は、ホスピスや学校を中心にライブ活動を行ってきており、小学生から高齢者まで、彼の癒しの歌を求めるファンの層は非常に幅広い。この幻想庭園でのライブ（2008年8月12日）に、大野靖之は他の数名のアーティストと共に出演した。

- (6) 簡単にライトアップする手段、方法として、まずはLEDなどをジオラマに埋め込んだりする案を実行してみたが、下地となるベニヤ板と土を表現する紙粘土の強力な接着の関係から、特に配線が難しく、残念ながら断念した。次に、山口福祉文化大学クリスマス竹ツリー行事をヒントに、蛍光塗料をジオラマに吹きかけ、周りからブラックライトを当ててみる方法を試してみた。こちらはきれいに有光発色し、成功したように思われたが、おそらくは塗料の吹きかけすぎが原因で、Nゲージの通電が悪くなってしまい、電車が全く走らなくなってしまったため、こちらも断念した。
- (7) この旅行前の1週間に、バーチャルな空間で日本庭園を造るゲームソフト『四季庭』（プレイステーション3、2008）をプレイしてみる計画を立てていた。8月末締め切りで、このゲームソフトで造った庭の写真のコンテストが開催されていたため、これに応募することを目標に取り組みさせる予定であったが、Rの部屋にゲーム機を持ち込んだところ、ゲーム機の故障か何かの不具合でテレビに映らず、こちらは断念した。
- (8) 箱庭療法における統合性やテーマ、配置などの読解の援用は行っていない。

引用・参考文献

- 1) 八尋茂樹 (2008) 「軽微な自傷を伴う若者へのエンパワメントアプローチ」『山口福祉文化大学研究紀要』第1巻第1号。
- 2) カルフ, D. M. (1972) 河合隼雄監修、大原貢・山中康裕訳『カルフ箱庭療法』、誠信書房。
- 3) 宮元健次 (1998) 『図説 日本庭園のみかた』学芸出版社。
- 4) エリクソン, E. H. (1981) 近藤邦夫訳『玩具と理性』、みすず書房。

謝辞 本稿における援助活動では、鈴木可南子氏の協力を得ました。ここに感謝の意を表します。